

故郷の畑から宇宙を見上げ

「いのちの重み」を思索する人

川奈静詩集『いのちの重み』に寄せて

鈴木比佐雄

1

川奈静さんは、一九三六年に千葉県安房郡富浦町（現在の南房総市富浦町）の小作農家に生まれた。中学時代から文学に関心を抱き、早稲田大学に憧れて入学したが、理想通りには学業は進まず、自己の能力に落胆することも多かったという。卒業後は帰郷し中学校の教員になり、学級活動などでは、日本赤十字社の青少年赤十字活動を取り入れ、ボランティア精神を養う地域活動に励んだ。川奈さんは地域を明るくするためにも、子供たちが地域に役立つボランティア活動を無償で実践することから、最も大切なことを学べると確信して

いたという。そんな子供たちの支援のために川奈さんは教師として汗を流してきたのだろう。

創作活動では、地元の文芸同人誌「やまもも」を長年主宰し、著書も今まで詩集を七冊、童話集や絵本を七冊ほど刊行してきた。既刊の詩集七冊は、子供をテーマにした詩篇が中心だった。川奈さんの今まで持続的に追求してきたことは、故郷の自然の中で田畑を耕し自分を育ててくれた父母の生き方を原点にし、教え子を含めた地域の人びと、その他の動植物のかけがえのない「いのち」が存在することへの驚きを表現してきたことだろう。それは川奈さんの第一詩集『萱の穂』を読んでみれば、「いのち」の根源を見つめていこうとする、先入観のない眼差しが存在していたことが分かるからだ。

一九八五年に刊行された第一詩集『萱の穂』は、四章に分かれた四十二篇の詩から成り立っている。

一章「葉っぱの手のひら」十二篇には、川奈さんの自然観がみずみずしく刻まれている。七行の短い詩である章タイトルの「葉っぱの手のひら」は、小さな子ども手のひらと五月の若葉の美しさが重なり合って、太陽の恵みを受けると感動が伝わってくる。

葉っぱの手のひら

五月の若葉は

小さな 光る手のひらの中に

とももろこしの粒ほどの

小さな太陽をつかんでいる

太陽は いち面にさしのべられた
かわいい緑の葉っぱの手のひらに
生きる望みをわけあっている。

五月の若葉の一葉一葉を子供の小さな手のひらのように感じ、その手のひらが「小さな太陽」をつかんでいるという。五月の若葉は、無数の小さな子ども手から成り立っていて、そんな無数の手のひらを見る者は「生きる望みをわけあっている」のだと告げている。地球上に生きるものが、太陽の光を細胞の中に取り込まなければならぬ宿命を端的に語っている。生きるものと太陽との関係をこれほど明快に言い切った詩篇は珍しい。川奈さんは大人になってもこの五月の樹木の若葉が「生きる望み」を伝えている瞬間を大切にしている。そしてもう一度、太陽からの生きようとすゝる意志を読む者の内部生命の奥深くに届けてくれる。川奈さんの詩は、子供に読んで欲しいと願って書かれているが、同時に大人が読んでも何かが啓示されるような純粹で本質的な直観が秘められ

ている。その意味では第一詩集は、子供心に存在

する純粋な視線が大人になっても反復するべき重要な原点であると考えている川奈さんの特長がよく表現されている。

次に引用する第一章の詩「代かき」には、川奈さんの生命観が描かれている。

代かき

小さな私が

大きな牛の鼻づらの竹を動かして

田の中を歩かせる

牛は日がな代かきに疲れて

土手に近づくとはね上がり

道具をつけたまま逃げだした

父と私は

逃げた牛を追ってつかまえて

また泥田の中へ引きずりこむ
牛は大きな目に

人間の拷問を怒っていた。

川奈さんの生きる原点には、父との農作業体験がある。その際に牛に一日中「代かき」をさせることで、牛の悲しみを身近に知り、牛の側からすると「人間の拷問」ではないかと牛に同情心を抱いている。父と自分たち家族が生きるために、牛を酷使しなければ生きていけない現実を、子供の頃から身体に感じていたに違いない。哲学書を読んでも決して現実と観念を分離させないように、観念や概念に血が通っている理念をきつと探し求めていたように思われる。この詩「代かき」を読むと川奈さんは人間だけでなく生きるもの全ての苦悩を和らげて、皆が幸せになる世界の可能性を探していることが分かる。人間は生きるため他の

生きものに「人間の拷問」を課してしまう存在である。そのことへの罪深さが伝わってくる詩だろう。このような精神性は宮沢賢治の童話『よだかの星』とも共通性がある。川奈さんの詩の特長は、

人間を見つめながら人間を超えてしまい、命の根源に向かつていく激しい衝動があることだと考えられる。その衝動の中には人間がこの世界の主役であるのではなく、一人の登場人物に過ぎないというリアリズムに徹した眼差しがあるように思える。

第一詩集『萱の穂』の発行所は、千葉県流山市に暮らした詩人・児童文学者であったおの・ちゅうこうが主宰していた「タラの木文学会」だった。おの・ちゅうこうは、詩集の題字や序文も書き、川奈さんの詩的才能を高く評価していた。川奈さんにとってこの「タラの木文学会」は、その後詩と童話を書き続ける土壌になったといえる。

二章「植物讃歌」九篇の冒頭に詩「朝のしみ」がある。この詩を読むと私たちが日常の忙しさで忘れがちなことを告げられている気がする。

朝のしみ

朝の路上に

ひとつのしみ、

いのちのあと

ささやかな営みが踏みじられた

荘厳な朝日も

生まれたばかりの死を

拭いさることはできない。

朝の新鮮な生命の満ち溢れた瞬間においても、昨夜の「ひとつのしみ／いのちのあと」である死

の痕跡を見つめなければならぬことを川奈さんは告げている。「いのち」を感じることは、昨日の「いのちのあと」である死を意識して生きることだと、この短い詩の中に込めている。三章「白い孤独」十二篇では、少年の孤独が野に咲く白い野菊と重ねあわされる。そして子供たちも川奈さんも生きる苦悩を抱える人間存在として、大いなる自然のただ中でその姿が光り輝いてくる。第四章「萱の秋」九篇では、萱という植物の生命力から家族や故郷の原点が照らし出されてくる。この第一詩集には、川奈さんのその後の創作活動の発想の源泉にも成っていくような、突き詰められた多様なテーマが存在していると感じられた。

2

第一詩集の後に川奈さんは、詩集『光るリボン』、『風はや』、『白い花が咲いたら』、『浜ひるがおは

パラボランテナ』、『ひもの屋さんの空』、『花のごはん』などの六冊の詩集を刊行して、子供と大人の両方に読まれる詩の可能性を追求してきた。今回の新詩集『いのちの重み』（四十三篇）では、川奈さんが初めて大人だけに意識を向けて書いてきた詩篇をまとめた詩集だ。その意味では、川奈さんが長年考えてきたことをかなり率直に詩の言葉に込めていてとても興味深い。一章「いのちの重み」（十二篇）の冒頭の「いのちの重み」は、川奈さんの人生観と詩的精神が合体した詩篇のように感じられた。

いのちの重み

ねこは

かるいね

わたのように

唯一 皮肉にも おまえの敵は

このわたしなのだから

（「いのちの重み」の前半部分）

まがった鋭い爪
すい直とびのバネ
ねずみをかみくたく歯
くらやみでもみえる目
ねこは
ふわふわ
くものように

ねこのすべての武器も
役にたたない
ふわりと だきあげて
悲しいと思うのは なぜ
おまえを わたしの自由に
動かさないよ と言ってみる

川奈さんは、身近な「いのち」の象徴として、「ねこ」の存在をあげる。私たち人間は「ねこ」のようなペットを抱き上げてしまう。その「いのち」を生かすも殺すもできる絶対者のように振舞う。人間の無意識の行動原理は「いのちの軽さ」によって他の生きものを支配してしまうことにあるのではないか。実際この地球の環境破壊は人間の飽くなき欲望によって引き起こされてきた。「ねこ」を愛玩物にしてきたことは、「ねこ」には迷惑だったかも知れない。「おまえの敵は／このわたしなのだから」という詩行がそのことを物語っている。川奈さんが「悲しいと思うのはなぜ」と自問するのは、「いのちの軽さ」を無意識

に行ってしまう人間であることへの羞恥心なのかも知れない。その意味では、川奈さんは、動植物の立場に立つてもものを感じてしまい、その人間をみだしてしまふ心的傾向があり、このような詩行の展開になっていくのだろう。この詩の後半部分も引用してみる。

ねこは いつから野性をすてて

ペットになりさがったの

食べものがなくて

おなかを空かすのがこわいのだ

アンデスの雪山の頂上から

発見されたインカの

あどけない子どものミイラ

おなかいっぱい食べて

ねこのように眠ったままの

やさしかった大人が だきあげて
ぬくもりのまま 神に献上した
最愛の子を 最上の捧げものとして

神が喜んだらうか

神が願いをかなえたらうか

いのちよ

重くなれ

利用されないように

(「いのちの重み」の後半部分)

川奈さんは、「ねこ」が人間を慕っているように見せているのは、餌を与えてくれていたからで、人間に抱かれることも嫌々ながら我慢しているのだと認識している。そんな「いのちの軽さ」

は、歴史的にも世界的にも明らかで、例えば、インカ帝国では最愛の子どもを神に捧げたことを語り、いくら宗教上のことであっても、人間の命が軽くあつてはならないと普遍的に語っている。そして最終連の「いのちよ／重くなれ／利用されないように」と命の尊厳を取り戻すために、人間だけが尊いという人間中心主義的な考え方や他の生きものや他者を利用するだけの功利主義的な考え方を痛烈に批判していくのだ。この「いのちよ／重くなれ」という詩行こそは、川奈さんの思想・哲学を最も端的に分かりやすく述べた言葉に違いない。

3

一章の他の詩「ひとつの井戸を」では、「深い井戸を掘る努力は／私を清める汗となるだろう」といい、「生きたことの証し」を成し遂げる方法

を示している。

詩「樹」では、「樹のたくましさ／樹のいちずな生きざまを」見習うことの大切さを伝えている。

詩「誰の土地」では、「地球の上では／みんな同じ権利があるんでしょ」といい、「増えすぎたのは人間なのに」と人間が他の生きものの生存権を犯していることを指摘している。

詩「白い花が咲いたら」では、地元の名産の枇杷作りの現状が本当に農家を幸せにしているかを問うている。

詩「芽吹く幸運児」では、山の畑の脇で「晩秋の蔓の下にいと、運が良ければ、黒い碁石の雨に打たれる」珍しい経験を語っている。

詩「置き去りの里」では、故郷を愛し枇杷作りに励んでいた壮年の知人の死を惜しんでいる。

詩「墓参」では、「こころでは一番天に近い山

の頂上／ここに灰をまきました」という散骨のすがすがしさを語っている。

詩「草むらの捨て犬」、詩「猿のブリッジング」、詩「クマの赤ん坊」などでは、犬・猿・熊などの動物の命を人間と分け隔てのないようにその命を慈しんでいる。

詩「娘の婚姻」では、「野蚕にみえるある山岳部族の婚姻のしきたりは／今も続く」ことの娘たちの葛藤を記している。

第二章「星の声が聞こえる」（十三篇）では、太陽系や宇宙から地球を眺めて、この世界にあることの不思議さや奇跡を伝えてくれている。またそれゆえに地上の価値観が時に小さなこだわりによって歪んでいることを痛烈に批判している文明批評的な詩も多い。また父母・祖父母たちの思い出に満ちた物たちから聞こえてくる声も記している。

第三章「ひとりぼっちの子守唄」（八篇）では、現代の少年・少女・青年達の孤独感、異常な犯罪者を生み出す情報社会、貧困国の犠牲に成り立つグローバル経済の在り方など、現代社会の病理を直視した詩篇が集められている。

第四章「小さな機影」（十篇）では、「いのちの重み」を大義名分で軽くすることによって、国民を戦場に送ってきた国家主義の巧妙さを暴いている。そして沖繩・広島・長崎などの戦争の悲劇だけでなく、日本の特攻隊を繰り返し送っている現代の自爆テロなどの悲劇の連鎖も語り継いでいく詩篇が集められている。詩「沖繩の怒り」や「ヒロシマを語り継ぐ」などの詩篇は多くの人たちに読んで欲しいと願っている。最後に章タイトルの詩「小さな機影」を引用したい。「どこまで飛んでいったろう／まだ帰ってこない」と特攻兵士だった少年の固有の「いのちの重み」を今も追想している。

川奈さんは国家が多くを死に追いやった歴史の実相を日本人が忘却してしまったら、再び戦争の悲劇が繰り返されることの危険性を告げている。地元で少年たちを育て、深く井戸を掘り畑を耕しながら、天上を見上げて宇宙意志のようなものに促されて詩作を試みてきた川奈さんの詩篇を、多くの人びとに読んで欲しいと願っている。

小さな機影

音もなく機影が近づく
星のように小さく光って
機内にバラの花をのせ
ジェット音をうしろにつけて

在ると見えるのは
遠くなれば差がわかる

数億光年の星もあるという
消えたのに見えているかもしれない

出撃まえの飛行士の写真
あどけない少年のまま
時は過ぎて六十年
どこまで飛んでいったろう
まだ帰ってこない

川奈静詩集 『いのちの重み』 栞解説文
鈴木比佐雄

コールサック社
2012